

激痛で搬送、練習できぬ日々

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)＝草津市

比叡山高硬式野球部当時の帽子を手にする土平ドンペイさん。汗だけでなく、涙もにじんでいるかもしれない。大津市の大津支局で



そこから決勝までスタメンで、好投手の長浜を100で破り優勝した。この中から新チームは半分くらいレギュラーになるんじゃないかというわさがあって、最低でもベンチに入れるやろ。

甲子園後の8月下旬、寮で目覚めたら、背中がめちゃくちゃ痛くて起き上がれず、息吸っても痛くて。救急車で大津市民病院に運ばれたんです。レントゲンを撮って、先生が「君、家族は知らなかったの」。肋骨の数が左右違ふと言われて。1本多いと、筋肉に負担が掛かり、息が吸えなくなるという状況でした。「安静に」と言われ、大阪の自宅から通うことになるんです。部活を休んだらもう出られんとさう、ものすごい怖さがあった。「見学させてください」とお願いしたら、「足歩けるやん。練習終わるまで歩いておけ」と言う先輩がいて。

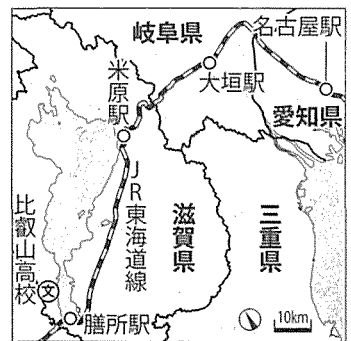
プレッシャーと練習の厳しさ、背中の痛み。精神的に病んでしまっていますね。大阪からJRに乗って来て、滋賀県に入っ

はい上がる人

わたしの歩跡

▲1982年8月初めに1年生野球大会があった。私立比叡山高校(大津市)が8強入りする夏の甲子園の直前だ。特待生やのに2回戦までは打って、5打数4安打ぐらい。

一大決心、野球に別れ



■16歳、涙の放浪

きたら、「もうあかん、もうあかん、もう行かれへん」と。京阪に乗り換える膳所駅で降りられなくて。乗り過ぎて気いたら米原駅。前に止まっている電車に乗り継ぎ、大垣駅(岐阜県)で豊橋駅(愛知県)行きに乗って、名古屋駅で降りたんです。お金もないのにこんなとこまで来てしまった。うろうろ歩き回って家に電話すると、お母さんが「何してるの。は帰っておいで」と。

背中が痛いので、新チームに備えた練習に入れないのがすごく悔しくて。ベンチ入りの発表までは我慢して行っていたんです。でも発表されたら15人の中に入っていませんでした。「あかん、こんなやつでられへん。学校やめるわ」と。

中学時代の監督に相談に行っただけです。当時は大阪府立谷高校の監督で、90年に中村紀洋さん(元近鉄などの強打者)を擁して甲子園に行くんですけど。「すぐに転校してこい。お

前は使いたくないから」

でも、比叡山高校は好きだったんです。1年のクラスは「頑張れや」という子たちばかり。担任に相談したら「いい生徒やから残したい」という話になってる。特待生やから本来は野球部やめたら学校をやめないけど、なんとか助ける方法がないか考えてくださって、「(担任が顧問をする)スキー同好会に入れ」と。「スキー履いたこともないよ。いいの?」「かまへん。とにかく入れ」

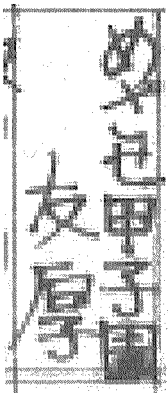
▲16歳の少年は悩んだ末、野球部を退部する。小学生のときから抱き続けた甲子園の夢がついた。1年秋のことだ。【エリア編集委員・大澤重人】

※ご感想や、ドンペイさんへの激励をメール(ooturu@maichichi.co.jp)などお寄せください。

ドンペイさんがフェイスブックで発信中。野球部の猛練習に耐える前回の連載には「この努力が我慢強きの下地となって」

コメントに返信

「コメントに返信しているんですね」などのコメントが寄せられました。ドンペイさんは時間の許す限り、コメントに返信しています。



小学校からの甲子園の夢がこぼれ落ちた1979年3月の大阪府箕面市立東小学校卒業アルバムから、友厚は本名